

## 詩篇119篇121～128節

- 121 私は公正と義とを行いました。私をしいたげる者どもに私をゆだねないでください。
- 122 あなたのしもべの幸いの保証人となってください。高ぶる者どもが私をしいたげないようにしてください。
- 123 私の目は、あなたの救いと、あなたの義のことばとを慕って絶え入るばかりです。
- 124 あなたの恵みによってあなたのしもべをあしらってください。私にあなたのおきてを教えてください。
- 125 私はあなたのしもべです。私に悟りを授けてください。そうすれば私は、あなたのさとしを知るでしょう。
- 126 今こそ主が事をなさる時です。彼らはあなたのおしえを破りました。
- 127 それゆえ、私は、金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します。
- 128 それゆえ私は、すべてのことについて、あなたの戒めを正しいとします。私は偽りの道をことごとく憎みます。

עֲשִׂיתִי מִשְׁפָּט וצְדָקָה בְּלֹא-תַנְיַחְנִי לְעִשְׂקָי:  
 עָרַב עֲבָדְךָ לְטוֹב אֶל-יַעֲשִׂקְנֵי יוֹדִים:  
 עֵינַי כָּלוּ לִישׁוּעָתְךָ וּלְאִמְרַת צְדָקָתְךָ:  
 עָשָׂה עִם-עֲבָדְךָ כְּחֶסֶדְךָ וְחַמִּדְךָ לְמַדְנִי:  
 עֲבָדְךָ-אֲנִי הִבִּינִי וְאִדְעָה עֲלֵתִיךָ:  
 עַת לַעֲשׂוֹת לִיהוָה הִפְרוּ תוֹרָתְךָ:  
 עַל-כֵּן אֶהְבֵּתִי מִצֹּתֶיךָ מִזָּהָב וּמַפֵּז:  
 עַל-כֵּן כָּל-פְּקוּדֵי כָל-יִשְׂרָאֵל כָּל-אֲרַחֲשֵׁי שְׂנְאֹתַי:

第十六字「アイン」はナメクジのような形の文字で、発音としては「アレフ」とやや似ていますが。「アレフ」が「軽い氣息音」(例: honest の h) であるのに対し、「アイン」は「舌の後部より奥で作られ出される強い喉頭音でゴクッと息をのみ込むような音」(例: ッア) です。

עֲשִׂיתִי (עָשָׂה) /アーシーティ (アーサー) …行なう、働く、作る、生産する  
 עָרַב (עָרַב) /アローヴ (アーラヴ) …誓いを立てる、交換する、担保にする (保証人となる)  
 עֵינַי (עֵינַי) /エーナー (アイン) …目  
 עָשָׂה (עָשָׂה) /アセー (アーサー) …行なう、働く、作る、生産する  
 עֲבָדְךָ (עָבָד) /アヴデカー (エヴェド) …奴隷、しもべ  
 עַת /エース…時、経験、機会  
 עַל /アル…～の上に (で、の)

119 篇の冒頭でも書かせていただきましたように、この箇所の一つの特徴は 122 節に「神のことば」を示す語が入っていないことです<sup>1</sup>。代わりにこの節では「保証人となる」(בַּרְטָן) という語が使われています。同じ語はイザヤ 38:14 でも使われていて、そこでは「主よ。私はしいたげられています。私の保証人となってください」と、そっくりの内容が綴られています。詩人が保証してもらいたいのは神から来る「幸い」(טוֹב／原意：良い) であって、信じる者にもたらされるべき「良い結果」と言うことができそうです。

詩人を苦しめていたのは「しいたげる者ども」(121)、「高ぶる者ども」(122) であって、彼らは「あなたのおしえを破り」(126)、「偽りの道」(128) を歩んでいたことが分かります。詩人はどのような害を受けていたのでしょうか。これが異邦人による虐げであるならば、罪を罪とも思わぬ無知から来る容赦なき攻撃と想像できます。しかし、殊にこれが同じ神の民による虐げであったとすると、その者は律法のことばを知った上でそれを都合よく曲解し、己が利得のために弱者を陰で蹂躪するという、更に質<sup>たち</sup>の悪い偽善者、羊の仮面を被った狼ということになります。詩人の複雑な心境を読み取るとき、後者によって苦しめられていたのではないかと想像します。

しかし、詩人は多くの欺瞞に取り囲まれている状況下にあっても、自分はどこまでも神のことばに立ち続けると宣言します。「私の目は、あなたの救いと、あなたの義のことばとを慕って絶え入るばかりです」(123) と血眼になって主の救いを探し求め、「私は、金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します」(127) と主の教えはどんな貴金属よりも価値があることを認め、最後は「私は、すべてのことについて、あなたの戒めを正しいとします」(128) と締めくくります。

この詩人の姿勢を見ると、彼はまだ見ぬ神の助けを信じて祈っていることが分かります。神の義が貫徹されることを信じ、動きの取れない現実を俯瞰しているのです。私たちが生きている世界も、己の利のためであるならば庶民の犠牲をも厭わぬ者たちによって支配されています。どの時代にも悪魔は形を変えて同質のことは行なっている。それならば、私たち信仰者はこの詩人と同じように神のことばに立つことにより、最終的な勝利に至るのではないのでしょうか。

信仰とは、望んでいる事柄の実質であって、見えないものを確証するものです。(ヘブル 11:1)

---

<sup>1</sup> 「技巧的と言えども一つ、本篇の中心主題を「神のことば」としながら、全節にそれと関連する語が用いられているというのにも驚かされます。これについては本文を学びながら説明させていただきますが、実は一つだけ例外があることにもふれておきましょう。「全節」とは言ったものの、なぜか 122 節だけにはその語が入っていないのです。作者はわざとそうしたのか、うっかり入れ忘れたのか。どうも前者が正解なようです。このことについて、小畑進先生は桂離宮を例に挙げて説明しておられます。」

「京都の桂離宮には、一か所だけ作りかけの窓が残されています。それは、離宮が完全ではないことを物語るといふ技巧中の技巧と考えられています。そのように、この第119篇は、入念な上に入念につづられています。人間の業には完成はない、との自覚を逆行で映し出す超絶技巧なのではありませんか。」(詩篇講録《下》p. 787)